

土塔出土刻書須恵器の検討

門田 誠一

〔抄録〕

行基の知識による造営とされる土塔（大阪府堺市）出土須恵器の銘文について、これまでいわれてきたような願文というよりは、「製儀」の語が示すように、造塔の儀軌を記した内容であることを論じた。その文章には知識の意義とその重要性を説いた『華嚴經』を含めた仏典をはじめとして、儒教の経書や道教經典をも参照しつつ、文脈のなかで天皇とその祖先に対する吉祥と繁栄を述べた内容がみられる。このような目的のために刻書須恵器は土塔

に設置されたのであり、その銘文の典故の年代および須恵質という材質と形状の面からみた伏鉢などの類品の存在を主たる証左とし、行基とその知識の活動などを傍証として、製作と設置は土塔が造営された八世紀代とした。

キーワード 土塔、須恵器、行基、知識、奈良時代

序言

大阪府堺市中区土塔町に所在する土塔は平安時代末の編纂とされるの『行基年譜』に神亀四年（七二七）の起工とあり、鎌倉時代末の『行基菩薩行状絵伝』には本堂や門とともに「十三重土塔」と記された塔が描かれていることによって、奈良時代の僧である行基らが建立

したとされる遺構である。これらの記述により、土塔は仏塔であることが知られているが、通有の木造塔ではなく、土を積んだ塔であり、土塔の名の由来となっている。土塔はその外形的な特徴とともに文字瓦が散布することなどから、つとに注目されるところに、建立者の実態が知られる仏教建築として重要であり、一九五三年には国の史跡に指定された。

その後、発掘調査（一九九八～二〇〇二年）によって階段状に土を盛り上げた一辺五三・一メートル、高さ八・六メートル以上の十三重の塔で、各層には瓦が葺かれていたことが知られた。⁽¹⁾全面に葺かれた瓦の総数は約七万枚を越える⁽²⁾とされる。そのうち文字や記号を記した瓦は一一七一点あり、それらの多くは人名であり、行基と共に土塔を建立した知識と呼ばれる人々の名と考えられ、男女を問わず僧尼や氏族の名前も知られている。⁽³⁾また、土塔から北西約一六〇メートルの地点では土塔に用いられた瓦を焼造した二基の窯跡が発見されており、大野寺瓦窯と名付けられ、直近で瓦を供給していたという土塔造営の具体的な事業体系の一面も知られている。出土遺物のなかには『行基年譜』の記述と同じ「神亀四年」と記された軒丸瓦も出土しており、土塔築造の年代の上限を示す資料となっている。

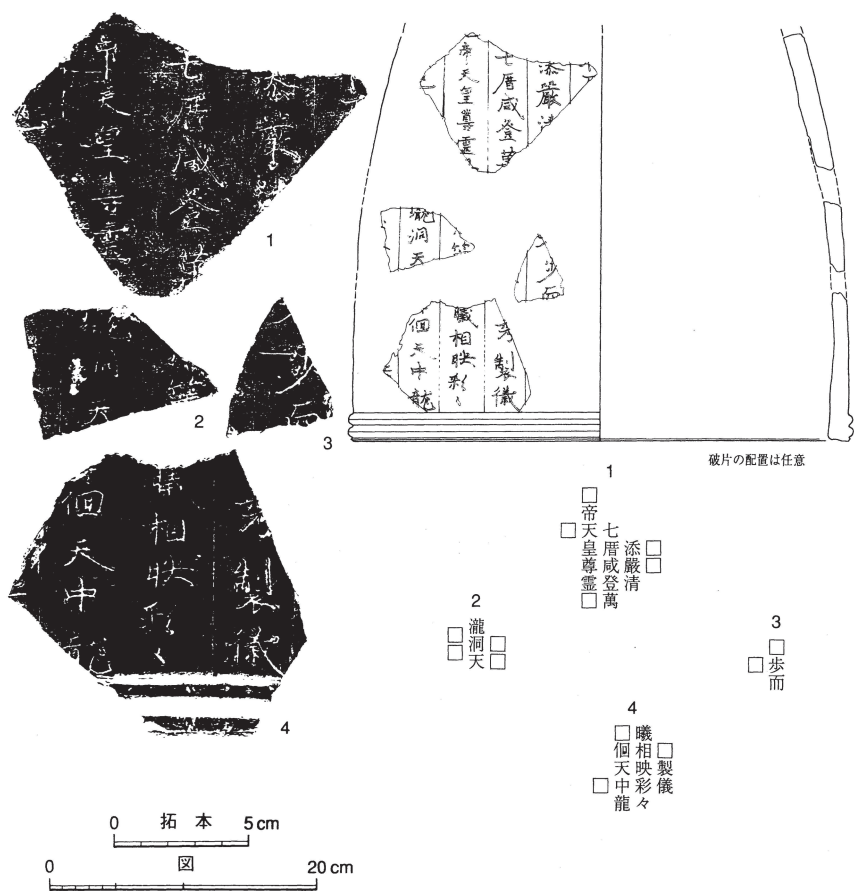
このような土塔を構成する瓦のほかに周辺から刻書銘文のある須恵器片が出土している。以下に述べるように、この銘文は本来の文章の断片であるが、文字瓦の多くが人名であることから、土塔建立に関する願文や銘文が記されていたと考えられており、これまでも言及がある。本論ではこの土塔出土須恵器銘文に関して、個々の語句の典故・典故と考古資料としての検討の双方から文章の意味と物質的な属性について考察する。

一 土塔出土須恵器と刻書銘文

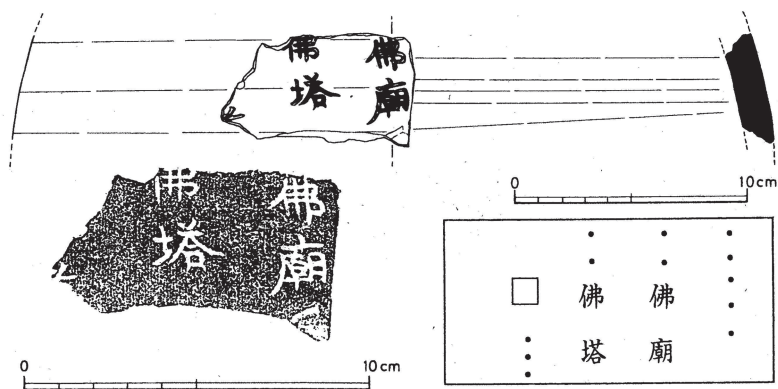
本論でとりあげる刻書のある須恵器は土塔の文字瓦を集成し、考察

を付して刊行された『史跡土塔―文字聚成―』に報告されている（図1-1）⁽⁴⁾。この報告（以下では報告書）によって以降の検討に關係する内容を摘要する。報告書によると刻書のある須恵器片（以下では刻書須恵器と略称）は四片あり、厚みは一・一～一・三センチメートルとほぼそろっており、焼成や色調などの観察から、これらは同一個体とみられているが、接合箇所はない。また、焼成や色調は土塔出土のほかの須恵器や瓦とは異なるが、胎土の特徴から土塔周辺の土が用いられたと推定されている。これら四片のほかに文字のない破片が出土していないことから、外面を全周するように文字が記されていたとみられている。形態は平面円形で、立面は上方が窄まる釣鐘形の器形と推定されており、外底部下端近くに二重一組の凸帯が廻り、凸帯部分での復元外形は三六・八センチメートルとされ、文字間の平均行間が三・一九センチであることから、約三六行であったと推定されている。ただし、1、4の破片では空格があることから、一行の文字数は厳密に定められていなかったとみられている。また、内面に残る粘土の目の方向から、成形後に倒立させて調整を行ったという製作方法が知られている。

出土位置に関して、報告書では特段の記載がなく、土塔本体では出土しておらず、すべて周辺部で出土したことが明記されている⁽⁵⁾。その後、報告者の一人である近藤康司氏によって、刻書須恵器破片四点すべてが土塔の西面から出土しており、塔頂に置かれていたものが西側に転落したか、西面に置かれていたかのいずれかであるが、土塔の正面は西側であるため、西面のどこかに置かれていたことを想定してい



1 土塔出土刻書須恵器



2 仏並遺跡出土刻書須恵器

図1 土塔出土刻書須恵器と関連資料 (1)

る。⁽⁶⁾

双方の見解には違いが大きいが、報告書には刻書須恵器の出土状態に関する図や記述がなく、土塔の瓦などとともに出土したという報告書の記述をもとに検討するほかはない。

土塔は瓦葺である構造上、維持するためには修築が不可欠となるが、平瓦の年代観から、八世紀後半頃に大規模な補修が行われたが、崩落した盛土の補修は行われなかったことがわかっている。⁽⁷⁾ なお、瓦の補修は一六世紀前半頃には行われなくなったとみられている。⁽⁸⁾

発掘調査によって判明したこのような事実から、刻書須恵器は土塔補修の時点で置かれた可能性は皆無ではないが、これまでの報告と研究では土塔の初築時に伴うものとされている。

土塔西面から出土した四点の須恵器破片の外面には刻線の縦野線が引かれており、その間に丁寧な行書で文字があり、須恵器の焼成前の胎土に突起状の器物で文字が記されたことがわかる。刻された文字（以下では土塔銘文と略称。須恵器そのものを指す場合は刻書須恵器とする）は下記のように判読されている（図1-1、以下の銘文の数字は報告書で付された破片の番号を表す）。

1 ☐ ☐

添嚴清

七厝咸登萬

☐ 帝天皇尊靈 ☐

☐

2 ☐ ☐

瀧洞天

☐ ☐

3 ☐ 歩而

☐

4 ☐ 製儀

曦相映彩々

☐ 個天中龍

☐

断片であるため、これまでの研究で通釈は提示されていないが、以上の釈字に関しては、報告書に掲載された拓本と実測図からも、各々の字が明瞭に判読できることから、これまで異釈は示されておらず、本論でもこれに従って次項以下の考察を行う。

二 銘文に関する諸研究

土塔銘文の語句と文章に関しては、これまで主として行基に関する研究のなかで言及されており、これらを中心に整理して、本論の考察に資したい。

まず、報告書では釈読を示したうえで、現在は所在不明の個人所蔵資料に刻書須恵器と同一個体の破片があり、その銘文に「彼岸の道（路）に遊ぶ」文章が記されていたことと、あわせて、和銅八年（七一五）の紀年のある栗原寺（奈良県桜井市）出土金銅伏鉢銘文（以下

では国宝指定名称に基づき粟原寺三重塔伏鉢および銘とする」に「皇太子神霊」「願七世先霊共登彼岸」などの願文があり、土塔銘文との共通点が指摘された。既述のように刻書須恵器は土塔周辺から出土しているが、文字瓦などと共伴していることから、土塔で用いられたものと結論した。また、外底部に二条一組の凸帯を巡らす器形的特徴から、妙心寺（京都市）・観世音寺（福岡県太宰府市）などの梵鐘や粟原寺三重塔伏鉢のような金属製品との共通性から、刻書須恵器は金属器製品を模倣して作られたと推定した。ここでは土塔銘文が仏教的な願文であり、形態は仏教的な金属製品を模したという基本的な知見が示された。⁽¹⁰⁾

報告書の考察篇で東野治之氏は土塔銘文の1の語彙などから推して、なんらかの願文のような文章である可能性を指摘するとともに、類似の内容として天平感宝元年（七四九）閏五月二十日付の聖武天皇勅書（静岡県平田寺所蔵）に「普天率土、有大威力天神地祇、七層尊霊并佐命立功大臣將軍之霊等、共起大禍、永滅子孫」（普天率土の大威力ある天神地祇、七廟の尊霊、並びに命を佐け功を立てたる大臣・將軍の霊ら、共に大禍を起こし、永く子孫を滅ぼさんことを）とあり、土塔銘文にみえる「七層」の語がみえることを参照して、「層」は「廟」の異体字であり、「七層」すなわち「七廟」は代々の祖先を意味するとした。また、上記の聖武天皇勅書は平城京の太寺に墾田などを施入した際に、勅意を妨害する子孫に禍が及ぶことを願ったものとされ、この文章との類似から、土塔銘文がなんらかの願文であると推定した。また、刻書須恵器の用途に関しては、熊山遺跡（岡山県赤磐市）で出土

した相輪状の土製品などとの関連を指摘した。あわせてヘラ書き瓦のほとんどが奈良時代前半であることから、土塔の主要な造営もおおむねその期間、おそらくは行基の在世中に行われたとした。⁽¹¹⁾

新川登亀男氏は土塔銘文および土塔に関して多岐にわたって言及しているが、本論に関係する部分を摘要すると、「七廟」の語から、土塔銘文の撰文に『論語』『孝経』などの基本的かつ最新の流布本に接する立場の人々が関与したことを想定した。さらに『礼記』王制篇にみえる「天子七廟」に関して、『続日本紀』延暦一〇年（七九一）頃までは認識が十分でなかったとし、土塔銘文の時点での「七廟」は『令集解』職員令撰津式大夫条の「古記」にみえる「百神集処」を「廟」としていることなどから、「七廟」が数の多さを示す可能性を示唆した。また、土塔銘文の「洞天」が道教の洞天福地と関連し、同じく「天中龍」も道教的な語句であり、「洞天」の「龍」であり、「洞天」が土塔そのものを指すとした。土塔そのものは厳密には廟でも仏塔でも墳墓でもない固有の形象物であるとし、それゆえに民間・民衆的であると位置づけた。⁽¹²⁾

吉川真治氏は土塔銘文を願文とし、文字は写経と類似するとした。土塔銘文の「天皇尊霊」の上部に「先帝」の文字の存在を推定したうえで、これまでの天皇の尊い御霊という意味であり、「七廟」は中国では天子の霊をまつる建物をいうのであり、日本古代にも「七霊尊霊」という用法があり、天皇霊が鎮まる施設を指すとし、土塔銘文ではそれが「登る」とされているから、先帝の霊について述べているとする。また、神龜五年（七二八）の長屋王願経の跋語にみえる写経に

よる功德を現天皇および開闢以来代々の天皇に奉げるといふ表現を参照して、土塔銘文も同様であり、「天皇尊霊」「七廟」の語は歴代天皇霊の安穩、もしくは極楽往生を願うための語句であつて、天皇霊の追善を願う内容であるとした。さらに「天皇尊霊」は近接する百舌鳥古墳群を指し、そこに鎮まる天皇霊の追善が祈られたと推定し、土塔は百舌鳥古墳群の総供養塔とする。そして、中国の宗廟は日本では山陵であることから、祈願を行ったのは土塔の壇越であり、山陵を造営し、葬礼・祭祀を行った土師氏である可能性を指摘し、行基は願文の内容を知っており、天皇・天皇霊は行基にとって忌避すべき存在ではなく、世俗権力への協力を反映しているとする。また、土塔の用途については伏鉢として、創建当初から頂部に立てられ、建立の祈願を記したとする。⁽¹³⁾

溝口優樹氏は唐・玄奘の『寺沙門玄奘上表記』所収の「請御製大般若經序表」（溝口氏は「寺沙門玄奘上表記」とする）に「上延七廟咸登萬福」とあるのに注目し、土塔銘文（溝口氏は須恵質製品・願文を記した須恵器などとする）と「七廟咸登萬」の五文字が共通することを指摘し、これを参照して土塔銘文が成文された可能性が高いとした。あわせて、玄奘の上表文では国家や皇帝への作善を祈願する文脈で用いられていることから、土塔銘文も同様に国家や天皇への作善を祈願するために用いられたとする。このような土塔銘文の内容に関する史的位置づけとして、平城京での活動に弾圧を受けていた行基が、自らの活動を天皇のための仏事であるとする理念を掲げることによって、土塔人名瓦にみえる首長層をはじめとした知識結集の正当性を示

し、こうした天皇への帰依と社会事業の開始は連動するとした。また、土塔出土文字瓦に「為父」「為丹比□」などの語があり、所在不明ながら、土塔銘文の断片に「彼岸の道（路）に遊ぶ」という文言があつたとされることを参照し、土塔の知識結集には「共に菩提に至る」という宗教的理念が掲げられていたと推定する。⁽¹⁴⁾

近藤康司氏は刻書須恵器の文字は人名瓦などとは異なり、優美な文字であることから、これを書写した人物は、人名瓦を記した集団とは隔絶した高貴な人物であるとし、土塔銘文に道教的語句があることから、道教思想に精通していたとし、また、刻書須恵器が土塔に献納されていることから、行基とつながりを持ち、かつ行基の知識集団の一員と関係するが、行基と行動をともしたのではなく、国家の中枢にいた人物である可能性を示唆した。⁽¹⁵⁾

これらの諸論を総括して現状の論点と課題を整理すると、土塔銘文の解釈に留まらず、製作と使用の時期や背景にいたる問題が含まれており、そのなかでも、刻書須恵器製作の背景としては、土塔造営の社会的背景やこれを主導した行基の活動に対する意義などが土塔銘文を通じて論じられている。次項以降では諸論の基本となった土塔銘文の内容について、用いられた語句を検討することによって明らかにする。

三 出典による銘文の検討

先行研究で指摘されているように、土塔銘文が仏典を典故とした語句や文章を含むとすれば、4の「製儀」は「儀」を「製」することと

解される。「儀」とは一般的な意味では、動作の手本とすべき規範という意味であるが、仏教では儀軌や儀文として仏典にみえる。いうまでもなく儀軌は密教の儀礼・行法や図像を指すが、儀そのものの意味として、より一般には法則・儀範・儀法の意味があり、この用例としてしばしばあげられるのは「仏々祖々の法はかならずそのはじめに帰依三宝の儀軌あるなり」という『正法眼蔵』帰依仏法僧宝の一文である。

これと関連して、仏典には儀や儀軌を撰文することは「製儀」として現れる。たとえば、刻書須恵器より時期的に下る仏典ではあるが、文章における用例としてみるならば、南宋・宗曉の『施食通覧』（一二〇四年撰）に引かれた楊鏐の『水陸大斎靈跡記』には水陸会の創始を述べた説話のなかに「製儀」に関する語句がある。その大略は、ある時、梁の武帝は夢に高僧をみて、その高僧から、あまねく衆生を助け、幽顕を利樂する、「水陸広大冥齋」を設けるようにと勧められる。翌朝、武帝は大臣や沙門にこれをたずねたが知る者がいない。その後、僧・志公（宝志）からの助言を受けて大蔵経論に広く照らしたところ、かつて仏弟子の阿難が焦面鬼王に会って施食を行った経緯を知ることができ、これをもとに儀文を作り、天監四年（五〇五）に金山寺（江蘇省鎮江市）で水陸会を催した、とある。この『水陸大斎跡記』では武帝が水陸会の儀文を製したことを「乃創製儀文」と記し、ほぼ同じ内容を記した仏典を参照すると、北宋・宗頤の『水陸緣起』に「創造儀文」とあり、南宋・志磐撰『仏祖統記』では「創製儀文」とされていることから、これらの文章は、いずれも「儀文」を初めて述作したという

意味となる。

水陸会は唐末以降に民間で盛行し、宋代以降には皇室も主催し、水陸に飲食を散じて諸鬼を救済する法会であり、最古の儀軌は上述の北宋・熙寧四年（一〇七一）に楊鏐が編んだ『水陸大斎靈跡記』であり、北宋・宗頤『水陸緣起』では、これを「製儀文」としている。⁽¹⁹⁾

これらを参照すると、儀の次第を記した文章を「儀文」とし、その文章を編むことを「製儀文」「創造儀文」「創製儀文」と表している。これらの仏典を参照すると、土塔銘文の「製儀」も儀またはそれを文章化した儀文を製したことを意味する。

「製儀」に関連する語として、土塔銘文作製時より時期的にさかのぼる仏典の用例として、唐代の義浄（六三五―七一三）によるインド・東南アジアの見聞を記した『南海寄帰内法伝』に梵に云うとして、インドにおける大聖すなわち釈迦の許した立播の服は漢訳では褌服衣となるとし、「其所製儀」とあり、その製する所の儀すなわち仏服を作る決まりを儀としている。⁽²⁰⁾

このように儀は仏教に関する儀範・儀法すなわち一定のきまりであり、土塔銘文の「製儀」も、何らかの目的語に対して、それを製する際の儀すなわち決まりを指すと考えてよい。そして、刻書須恵器が土塔周辺から出土していることから、「製儀」の対象は土塔であり、土塔の製儀あるいは土塔を製するところの決まりである儀を記した文章であったと考えられる。

2の「瀧洞天」の「洞天」に関しては、すでに指摘されているように道教の洞天福地と関連する。そのうち洞天は神仙の住むとされる仙

境のことで、唐代以前の道教經典にすでに現れ、南朝・陶弘景の編になる『真誥』やその他では『道迹經』などにみえることから、東晋代には形成されていた觀念であると考えられている。洞天を十大洞天・三十六小洞天・七十二福地などとするのは唐・玄宗朝すなわち八世紀前葉頃に活動の中心がある上清派道教の道士である司馬承禎（六四七～七三五）の作とされる『天地宮府圖』によって各地に散在していた聖地が洞天福地として体系化されたことを契機し、人災・天災の及ばない肥沃で淨福な土地を意味する福地とあわせて、洞天福地という概念が成立したとされる⁽²¹⁾。土塔銘文の「洞天」以下は欠失しており、前後の文章は不明であるが、六朝期以降の中国における洞天的思想的展開を勘案すると、八世紀前半という土塔の造営時期から、少なくとも道教的語句であることは認めてよからう。

4の「曦相映彩々」の「曦」は一義的には美しい太陽および太陽の光を指し、これを端的に表す語として、『水經注』には三峡の叙述として、三峡七百里にわたり、兩岸に巖が連なり、ほぼ欠けるところがない。重なる巖は疊なる嶂が、天を隠し、日を蔽い、自ずと真昼と夜半でなければ曦月が見えない、とあり、日月に対応する語として曦月が用いられている⁽²²⁾。

「相映」は仏典のみならず諸書に散見されるが、土塔銘文と類似した用例としては鳩摩羅什訳『大莊嚴論經』卷第二に「若し日出ずる時は王宮殿を照らし、暉曜相映にして常明に倍す」とあり、日が出た時は王宮殿を照らし、その暉曜すなわち日の美しい輝きが相映じて、常の明るさの倍になる、と述べられている。土塔銘文も曦すなわち陽光

が相映じて、「彩々」と輝く有様が述べられているとみてよからう。

同じく4の「□箇天中龍」の「箇」は箇と同義であって、めぐる、さまようを意味する形声文字である。「天中龍」は研究史でふれたように道教の洞天に住む龍とする説が示されているが、文章としては旧約『華嚴經』あるいは卷数から六十華嚴と通称される東晋・天竺三蔵仏跋陀羅訳の『大方広仏華嚴經』（以下では『華嚴經』）賢首菩薩品の文章の一部として現れている。すなわち、文殊師利が賢首菩薩と問答を交わした内容として諸天に言及したなかで、「諸龍の住处では頻伽の聲、微密天中には龍女の聲」とあり、諸天の一つである「微密天」には龍女の聲が響いていることを示す。「天中龍」はこれに続く文章が記された部分が欠失しており、また、「天」の前にその詳細や種類を説明する語はないが、「天中龍」の語の続き方からして、字句の次元で『華嚴經』賢首菩薩品を典拠とする可能性がたかい。

仏教に関連する龍としては、仏法を守護する八部衆（天龍八部衆ともいう）の一つとしての龍が知られるが、これは天衆・夜叉衆・乾闥婆衆・阿修羅衆・迦楼羅衆・緊那羅衆・摩睺羅伽衆とともに八神を構成する種族としての龍衆である。これを傍証とするならば、土塔銘文にみえる「天中」の「龍」を示す内容および文章の続き具合からも『華嚴經』賢首菩薩品を基にした字句であろう。このようにみると、「□箇天中龍」の文章は「□箇」で区切りがあり、その後続く「天中龍」は別の文章であるとみられる。

1の「七厝咸登萬」はすでに指摘されているように、龍朔三年すなわち六六三年に上表された玄奘「請御製大般若經序表」を典拠とした

ことがわかつてゐる。「七厝威登萬」に続く「□帝天皇尊靈□」は天皇および祖先に対する吉祥句的な文言である。この語を含めた土塔銘文の示す内容については後述する。

四 語句からみた銘文の内容

ここまで示した土塔銘文の語句や文章に対する典故や出典と関連した文献や仏典・経書などを参照することによって、さらに深くそれらの意味を検討し、土塔銘文の内容と属性の考察に資したい。

土塔銘文にみえる「製儀」で儀を製した対象は、いうまでもなくこれが記された刻書須恵器が使用された仏塔としての土塔そのものである。これによって土で塔を造営することに関わる儀軌であるとみられる。そもそも土で塔を造営することは『法華経』方便品に「若し広野の中に於て土を積んで仏廟を成し、乃至、童子の戯れに沙を聚めて仏塔を為す。是の如き諸人等、皆已に仏道を成じたり」とあり、すなわち、広野において、土を積んで仏廟を建立し、またたとえ子供が戯れに砂を集めて仏塔を造ったとしても、このような人々は皆すでに仏道を成した、として象徴的に説かれる。このように土で塔を造営することは、土塔造営時点で広く流布した『法華経』にみえる内容である。このことは次項でふれるように近隣の仏並遺跡で出土した陶製伏鉢とされる須恵器刻書銘文に『法華経』方便品の上記の文章の一部が記されていたことから傍証される。

仏典に説かれる土をもって塔を造ることの意味を土塔造営に即して

説明したのが、土塔銘文にみえる「製儀」であると思われる。仏教信仰における行為の一定のきまりである儀を含む語として、造塔に直接的に関係する内容は八世紀後半以降に訳経活動を行った般若三蔵の訳になる『造塔延命功德経』に造塔の功德とその儀軌が説かれている。

すなわち、相師すなわち人相見にあと七日の寿命と告げられた波斯匿王が世尊に延命法を請うたところ、世尊は発心し、持戒し、福を修めせよと教え、その最上の福は造塔であり、昔、牧童があと七日で命が終わると予言された時に、戯れに砂を集めて塔を造り、これによって七年の寿命を得たとある。また、諸々の童子が戯れに砂を以て糗（麦こがし）であるといって辟支仏の鉢に施すと、これらの童子に授記し、さらに辟支仏は砂の塔を造った者は、砂の量によって一磔手から順次、四磔手まで、来世は鉄輪王・銅輪王・銀輪王・金輪王になるとし、この故事を述べて仏は童子の砂の塔でさえ、このように感得するところがあるのだから、造塔の功德は計り知れないと説いて造塔を勧める、などが説かれている。⁽²⁶⁾そして、造塔の軌儀法則として、第一に妙華を採集し、陀羅尼加持七遍を以って、壇上に散布し如来に供養す、次にその陀羅尼を示す、というように十二の方法の一々をあげる。⁽²⁷⁾経の最後には造塔の功德によってもたらされる福の例として、破壊した塵土に触れても、将来、仏と見（まみ）えるなどをあげる。⁽²⁸⁾土塔の造営時期的よりは下るため、参考事例ではあるが、造塔の功德を説く仏典は多いなかで、具体的な軌儀すなわち方法をあげてこれを説く内容は『造塔延命功德経』の特徴であり、土塔銘文の解釈にも参考となる。

土塔銘文の「洞天」の語は道教經典にみえる語であり、道教の仙境であるが、そのいっぽうで、第六洞天である天台山⁽²⁹⁾や第七洞天である峨眉山⁽³⁰⁾、第八洞天の廬山⁽³¹⁾は仏教の靈山でもあった。周知のように天台山は南朝から隋にかけての智顗が修養したこと⁽³²⁾で知られ、峨眉山では東晋・慧持、廬山では東晋・慧遠らの高僧によって仏教講学がなされた⁽³³⁾。これらに関して、唐の道士である徐靈府の撰になる『天台山記』には天台山中の赤城丹山の洞が上玉清平の天であり、周迴三百里で十六洞天の第六洞であることなどが記されている⁽³⁴⁾。また、北宋・陳舜俞の『廬山記』には山中の詠真洞は『真誥』が述べる三十六洞天の第八天詠真洞天であり、七十二福地の一つであることがふれられている⁽³⁵⁾。

道教において洞天の語と思想が熟成し展開するのは、すでにふれたように八世紀前半を中心とした上清派道教の司馬承禎による洞天福地の体系化を契機とするとされるから、土塔の造営年代とはほぼ同時代であり、「瀧洞天」の「洞天」が道教やその經典によるとすると、土塔銘文の撰文に同時代的な影響を及ぼしたことになる。

土塔銘文の「七厝咸登萬」は玄奘「請御製大般若經序表」にみえ、これに続く「□帝天皇尊靈□」は「天皇および祖先に対する内容である。途中の文章が欠落しているため、釈読は難しいとしても、玄奘の上表文が皇帝の「萬福」を祈念したのに対し、これまでもいわれているように土塔銘文では天皇およびその祖先に対して万福を祈願したものと推定される。

「七厝」の語そのものは『礼記』礼器に「礼に多きを以て貴と為す者あり。天子は七廟、諸侯は五、大夫は三、士は一」として、礼制には

物の数が多いほど尊貴なものとする⁽³⁶⁾ことがあり、廟の数によって尊貴を示し、天子の七廟をもって至高のものとして、天子の祖先を祀る廟を象徴的に示す。後には王朝によって天子の廟の数は推移をみせるが、その原理的な制として天子七廟がある。土塔銘文の「七厝咸登萬」「□帝天皇尊靈□」は天皇の祖先祭祀を示す「七廟」の語であって、以上のような儒教的な祖先祭祀を包摂している。

さらに「七廟咸登萬」の典拠である玄奘の「請御製大般若經序表」には、これに続いて「皇帝皇后重暉日月」とあり、皇帝皇后が重ねて日月を暉（かがやか）すことを述べていることを参照すると、土塔銘文の別の部分にみえる「曦相映彩々」の「曦」の字義は美しく光る太陽を意味することから、陽光としての天皇を指し、それが「相映彩々」として映え栄えることを比喩的に示していると考えてよからう。以上のように土塔銘文の基本的な内容は造塔に際する儀文であり、儀軌であって、その文章は仏典のみならず道教經典や經書をも参照しつつ、行文のなかで天皇とその祖先の尊貴を背景とし、その万福や繁栄が述べられている。

五 刻書須恵器の機能・目的と時期

ここまで縷々検討してきた土塔銘文の内容と関連するのは、これが刻された刻書須恵器の本来の形態およびそれと関連する用途・機能や目的と所属時期であることはいままでもない。このうち形態に関しては、これまで出土している刻書須恵器の破片は想定される全体の形態

からすると、ごく一部にすぎず、報告書では直径が推定されて参考資料として図示されているが、残存する端部の割合からみて、この部分の傾斜を含む全体の形状を復元することは難しいといわねばならない。

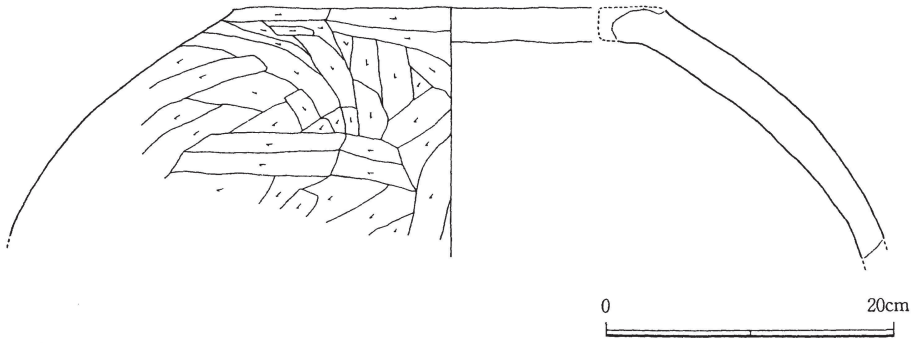
いっぽうで、報告書で指摘されているように、端部に巡らされた二条一組の凸帯は金属製の器物を模して製作された須恵器である可能性が高い。塔を構成する部材として、本来は金属製であるが、須恵器によって模され、かつ平面形が円形である遺物としては、仏並遺跡（大阪府和泉市）で一一世紀後半頃と推定される「仏廟・仏塔」刻書銘のある須恵器片が出土しており（図1-2）、陶製伏鉢の可能性が指摘されている。⁽³⁷⁾ 仏並遺跡出土須恵器片は銘文の存在や形態などの点で土塔刻書須恵器と類似することから、土塔須恵器の本来的な器形は伏鉢状である可能性がある。陶製伏鉢の類品として、東国では窯業遺跡である山田窯跡（水戸市・九世紀中頃、図2-1）、木葉下窯跡三ヶ野支群（水戸市・八〜九世紀、図2-2）などで須恵質の陶製伏鉢の可能性のある遺物が報告されており、それ以外にも台渡廃寺（観音堂山地区）（水戸市・七世紀末〜八世紀初頭）では相輪様の陶製相輪と陶製伏鉢の可能性がある遺物の存在が示唆されている（図2-3）。⁽³⁹⁾

これらのうち、とくに仏並遺跡出土刻書須恵器は時期的には平安時代末を下限とするとされるが、焼成も須恵質であり、体部には造塔の所依經典である『法華経』方便品の一部である「仏廟」「仏塔」の仏典に由来する語が刻されており、加えて、直線距離で約一五キロメートルと地理的にも土塔に近いなど、両者の機能や密接な関係が想定され、用途や機能の面でも類似することが想定されている。⁽⁴⁰⁾

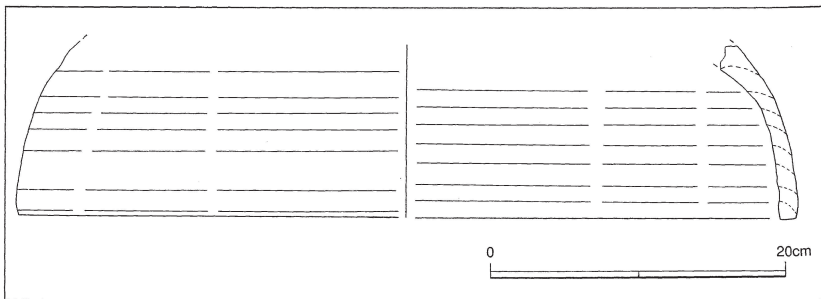
ただし、伏鉢は多層の木塔の場合、相輪などの露盤上にある鉢を伏せたような形の部材であり、その上に請花・九輪などをのせる。土製の多層塔である土塔の場合はこのような多層の木塔での伏鉢の用途とは異なることも想定されるが、少なくとも仏塔としての土塔を構成していた部材と推定してよからう。

出土状況等が不詳なため刻書須恵器が土塔の頂部に使用されたどうかは不明とするほかないが、破片が土塔周辺部の各所から散在的に出土している点は、本来の位置は不明ながら土塔の造営に伴って使用されたことを示している。よって、すくなくとも刻書須恵器は土塔本体で使用されたと考えて太過なく、伏鉢を典型とする土塔に伴う構造物または構成部材の一部であることが確認される。

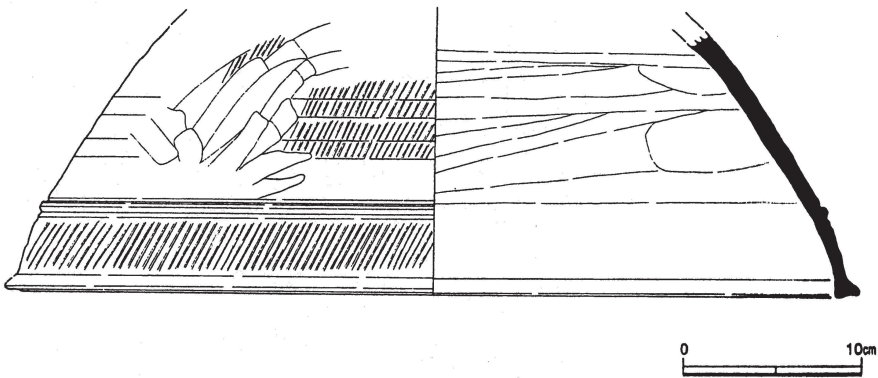
刻書須恵器の製作または使用時期については、器種が稀少であり、全体の器形も復原不可能であり、かつ出土状況も明確ではないことから、型式学的あるいは層位的な検討は難しい。むしろ、刻書須恵器の製作年代の上限を厳密に示すのは土塔銘文にみえる玄奘「請御製大般若経序表」を典拠とする文言であり、これを参照したとすると、刻書須恵器の年代は六六三年を上限とし、「神亀四年」銘軒丸瓦から推定された土塔の造営年代の上限である七二七年とは矛盾しない。刻書須恵器の製作時期或使用年代の下限に関しては直接的な根拠となる考古資料はないが、器形的に類似する仏並遺跡出土刻書須恵器は包含層出土であることから、原初的な設置・使用場所や状態は不明であるが、一一世紀後半を下限とする年代を参照するならば、刻書須恵器や仏並遺跡刻書須恵器などの類型的な遺物の本来的な機能や意味は、この時



1 山田窯跡



2 木葉下窯跡



3 台渡廃寺

図2 陶製（須恵質）伏鉢の例

期にはすでに失われていたとみられる。

さらに、これまで指摘されているように土塔銘文の内容が和銅八年（七一五）の紀年を含む栗原寺三重塔伏鉢銘と類似するとすれば、土塔の年代の一端もここにあるとみてよい。既述のように台渡里廃寺では七世紀末～八世紀初頭と推定される陶製相輪や伏鉢と推定される須恵器破片が出土している。⁽⁴¹⁾形態の比較検討ではないため、残存状態の良好な遺物の挙例にとどめるが、下寺尾廃寺（神奈川県茅ヶ崎市・七世紀後半）で陶製相輪の破片が出土し、⁽⁴²⁾須恵質九輪の破片が開ヶ丘中遺跡（富山市・八～九世紀）、⁽⁴³⁾北山廃寺（和歌山県紀の川市・八世紀）などで出土している。また、山城神雄寺跡（京都府・八世紀中頃）では塔跡付近の遺構から瓦製九輪破片が出土している。⁽⁴⁵⁾窯跡では札馬四七号窯（兵庫県加古川市・一〇世紀前半頃）から相輪の蓮弁を配した請花の須恵質の破片が出土しており、⁽⁴⁶⁾戸津窯跡（石川県小松市・一〇世紀）では陶製水煙が出土した。⁽⁴⁷⁾これらのなかには台渡里廃寺のように建物はなく、心礎上に直接相輪を載せる相輪様と推定されるものもある。⁽⁴⁸⁾これらの事例から、陶製・瓦製の相輪・伏鉢などは出現が七世紀後半にさかのぼり、八世紀代以降を中心として一〇世紀頃まで使用されたことが知られる。⁽⁴⁹⁾以上のような須恵質を主とした陶製の伏鉢・相輪などの塔の部材が盛行する時期を傍証とするならば、同じく塔に関わる須恵質の部材ないしは構成物である土塔刻書須恵器は八世紀代以降に製作され、使用された可能性が高い。

さらに状況証拠ではあるが、土塔銘文が「請御製大般若經序表」を引いていることに關して、土塔を造営した行基の師と伝えられる道昭

は、「⁽⁵⁰⁾適（ゆ）きて玄奘三藏に遇（あ）い、師として業を受く。三藏、特に愛でて、同房に住まわしむ」で始まる『続日本紀』の記述では、玄奘が西天取經で得た愛用品を道昭が賜ったとする辞別の逸話があり、これをはじめとして、『日本靈異記』『扶桑略記』『今昔物語』『宋史』『仏祖統紀』などには入唐して玄奘に師事し、慈愛を受けたことが記されている。⁽⁵¹⁾道昭は帰国後、天智天皇元年（六六二）に飛鳥寺に接して禪院を営むので、それまでには帰国したとみられ、⁽⁵²⁾そうであるとすれば、玄奘による龍朔三年（六六三）年の「請御製大般若經序表」の上表時には在唐していないと思われるが、土塔銘文の撰文に「請御製大般若經序表」を典拠としていることは玄奘から道昭を経て行基という師弟の系譜が背景にあった可能性を示している。このような推定が可能であるならば、さきにふれた塔に關する須恵質を主とした陶製の部材の時期のなかでも、行基の活動期である八世紀前半の土塔造営時に刻書須恵器が製作、使用されたと推定される。

六 土塔出土刻書須恵器の史的意義

この項ではここまで縷説してきた内容を総括して、結論として提示したい。まず、土塔銘文の内容と目的は次のように整理することができる。土塔銘文には仏教的な規範・法則である儀を製した、とあり、出土位置や状況は未詳であるとしても、刻書須恵器は土塔周辺から出土していることから、土塔銘文の「儀」は土塔に対する儀軌であり、銘文はそれを記した儀文と考えられる。既述のように、このことは近

隣の仏並遺跡で出土した陶製伏鉢とされる須恵器刻書銘文に『法華經』方便品の造塔に関する文章が記されていたことから傍証される。土塔の刻書須恵器と同様に塔の構築部材に銘文を記し、造塔の目的などを記すことは、古代仏教の始原期以降に行われた造塔にかかわる祈願の行為であるが、土塔出土刻書須恵器と時期的に近い例としては、すでにふれたように粟原寺三重塔伏鉢銘があり、土塔銘文と共通する語が指摘されている。

粟原寺三重塔伏鉢銘は皇太子の菩提を弔うために、比売朝臣額田が二十二年を要して伽藍を建立し、丈六釈迦仏像を安置し三重塔を造立して草壁皇子の菩提を弔い、祖先の追福を行うとともに発願者の大嶋大夫すなわち仲臣朝臣大嶋の正覚を祈願したという内容である⁽⁵³⁾。この銘文では亡き皇子に対する追福と発願者の成仏を祈願しているのであり、土塔銘文と材質等は異なるが、祖先祭祀の語句を含む点では一致し、双方に同様の内容がみられる。ただし、土塔銘文は文脈のなかで祖先祭祀にふれているのであり、刻書須恵器の製作と使用の目的そのものは「製儀」すなわち土塔の造営の儀軌を記した儀文であることを記している。

儀軌を記した文章の内容を推定するならば、土塔銘文には天皇の靈魂や祖先に対する吉祥を念ずる語句がみられ、皇太子とその祖先などの追福を記した粟原寺三重塔伏鉢銘と土塔銘文には類似の語があることから、双方には近似した目的があり、具体的には天皇・皇祖の追福であり、物質的な属性としては八世紀以降に出土例が知られる陶製伏鉢などと類似することを勘案すると、塔を構成する部材であったと考

えられる。

「七厝咸登萬」の語は玄奘『寺沙門玄奘上表記』にみえる「請御製大般若經序表」の文章を典拠としており、大般若經の漢訳によって皇帝と皇室の永劫の万福と繁栄を祈願し、序文を請う部分に用いられており、土塔銘文もこれになぞらえて土塔の築成によつて天皇と皇室およびその祖先の万福と吉祥を祈願した内容であると推量される。

さらに、土塔銘文の典故である「請御製大般若經序表」には「皇帝皇后重暉日月」とあり、皇帝皇后が重ねて日月を暉すと述べていることから、「相映」の主語は、「曠相映彩々」とあるように、陽光としての天皇が映え栄えることを表しているとみてよからう。

また、「洞天」の語から土塔銘文には道教的要素があったことが知られるとともに、その成文および須恵器の焼造の年代推定に関しても洞天に対する信仰が体系化される唐代中期（八世紀中頃）前後が一つの端緒となり、土塔の造営年代とも大きな齟齬がない。

「天中龍」は残存部分が断片であるが、天中にある龍という字句を斟酌するならば『華嚴經』賢首菩薩品を典拠とした可能性がたかい。

万一、これが失当でないならば、『華嚴經』は大乗經典のなかでも、善知識の意義とその重要性を最も詳細にかつ深く、広く説くこととの関連が想定される。『華嚴經』の善知識に関して、一般的には入法界品に説かれる善財童子が善知識を歴訪して菩薩道の理解を深化していく内容として知られる。ただし、この部分以外にも善知識が説かれ、そのなかで賢首菩薩品は善知識において信徳の広大なことを強調し、善知識に親近することの重要性が説かれている⁽⁵⁴⁾。

すでにふれように学史的に土塔は知識とみられる人々の名を記した人名瓦が多数出土していることから、知識による造立が想定されており、実際に彼らの遺した「知識」の刻字のある瓦も出土しており、このことが裏づけられている。⁽⁵⁵⁾ よって、土塔銘文に知識によって信仰の深化を説いた『華嚴経』に所依する語句が記されていることは首肯できよう。

以上の考察によって、土塔銘文は造塔の儀軌ないしは造塔による儀軌の完遂を記し、それによって天皇および皇祖の万福を祈念する目的で、玄奘による表や仏典・道教・儒教の經典などに所依する語句や文章を用いて成文されたと推定される。

最後にこのような土塔銘文と刻書須恵器の意味について、土塔建立を率いたとみられる行基との関係からふれておきたい。周知のように『続日本紀』養老元年（七一七）四月壬辰条には「小僧行基並びに弟子等」で始まる行基およびその集団の布教活動を律令に背反する行為として糾弾する内容がある。⁽⁵⁶⁾ しかしながら、天平三年（七三一）には行基に従う優婆夷・優婆塞のうち、法のごとく修行する高齢者の得度を許可しており、その後、天平一七年（七四五）に行基は大僧正に補任されるにいたる。⁽⁵⁷⁾ この間にいたる律令国家や天皇と行基の関係に関しては多くの研究があるが、ここでは土塔と刻書須恵器に関する考古学的知見の一環として位置づけるならば、土塔の建立は出土した瓦当銘の神亀四年（七二七）頃とみられており、これは上記の養老元年と天平三年の間にあることがとりわけ注目される。すなわち、行基とその集団と政府との関係が変容する過程で土塔が建立されており、その

造営行為は行基集団の政治や社会との関わりの変換点となった事業であったと位置づけられよう。⁽⁵⁹⁾ そのような史的意義を有する土塔の造営に際して、仏教・道教・儒教の經典に所依する語句を用いて、天皇およびその祖先の祭祀に関する内容を含む文章が記された須恵器が用いられたのである。

結語

本論の考察結果は前項で述べたため、文末に結論のみを端的に示し、結語にかえたい。土塔出土須恵器の銘文について、これまでいわれてきたような願文というよりは、「製儀」の語が示すように、造塔の儀軌を記した内容であって、その文章には玄奘の表や知識の意義とその重要性を説いた『華嚴経』を含めた仏典をはじめとして、儒教の経書や道教經典をも参照しつつ、文脈のなかで天皇とその祖先に対する吉祥と繁栄を述べた内容がみられる。このような目的のために刻書須恵器は土塔に使用されたのであり、用途および年代としては土塔銘文の典故の年代および須恵質を含む陶製伏鉢との形状の面からみた類品の存在を証左とし、土塔を構成する部材であり、行基とその知識の活動などを傍証として、製作と使用は土塔が造営された八世紀前半とした。本論では出土文字資料と呼ばれる文字や銘文を有する考古資料に関して、考古学的知見を重視し、土塔銘文の内容吟味と刻書須恵器の機能と意味を中心に考察した。行基に関する研究は膨大であるが、これらに用いられる同時代の史料・文献は存外に少なく、後代の文献や説

話などが主体である。このような史料状況は今後も変わることはな
いたため、今回検討した土塔およびその出土遺物は同時代資料として、
新たな研究の視点を提示しうる。

本論が今後、行基との知識の活動を含めた奈良時代の社会史や宗教
史、文化史の研究の進展にいささかなりとも資することを願うととも
に、諸般の教示を得て、新たな視野を開きたく思う。

〔注〕

- (1) 堺市教育委員会編『史跡土塔―遺構編―』（堺市教育委員会、二〇〇七
年）
- (2) 近藤康司「土塔の構造復元」堺市教育委員会編『史跡土塔―遺構編
―』（前掲注1）のち『行基と知識集団の考古学』（清文堂、二〇一四
年）所収
- (3) 堺市教育委員会編『史跡土塔―文字瓦聚成―』（堺市教育委員会、二〇
〇四年）
- (4) 堺市教育委員会編『史跡土塔―文字瓦聚成―』（前掲注2）
本論の在銘須恵器および土塔銘文に関する事実関係は報告書のなかで
も下記の論考によっている。白神典之「第2章第3節 願文を記した
須恵器」
- (5) 白神典之「第2章第3節 願文を記した須恵器」堺市教育委員会編
『史跡土塔―文字瓦聚成―』（前掲注2）
- (6) 近藤康司『行基と知識集団の考古学』（前掲注2）一五五頁
- (7) 近藤康司『行基と知識集団の考古学』（前掲注2）九〇～九六頁
- (8) 堺市教育委員会編『史跡土塔―遺構編―』（前掲注1）六六頁
- (9) 堺市教育委員会編『史跡土塔―遺構編―』（前掲注1）八三～八四頁
- (10) 白神典之「第2章第3節 願文を記した須恵器」堺市教育委員会編
『史跡土塔―文字瓦聚成―』（前掲注2）
- (11) 東野治之「土塔の文字瓦」堺市教育委員会編『史跡土塔―文字瓦聚成
―』（前掲注2）
- (12) 新川登亀男「行基集団にみる東アジアの宗教展開」早稲田大学21世紀
COEプログラムアジア地域文化エンハンシング研究センター編『ア
ジア地域文化の構築Ⅱ（早稲田大学21世紀COEプログラムアジ
ア地域文化エンハンシング研究センター、二〇〇四年）
- (13) 吉川真司「聖武天皇と仏都平城京」天皇の歴史Ⅱ巻（講談社、二〇一
一年）一六〇～一六七頁
- 吉川真司「土塔と行基集団」堺市市長公室文化財課編『堺の誇
り土塔と行基』史跡土塔講演会録（堺市市長公室文化財課、二
〇一〇年）
- (14) 溝口優樹「大野寺土塔の知識と古代地域社会」『日本古代の地域と社
会統合』（吉川弘文館、二〇一五年）〔初出は二〇一三年〕
- (15) 近藤康司『行基と知識集団の考古学』（前掲注2）一五五～一五七頁
- (16) 『水陸大斎跡記』については下記論文参照。
坂本広博「水陸大斎跡記」（『施食通覧』所収）をめぐって（『叡山
学院研究紀要』二五、二〇〇三年）
- (17) 『水陸大斎跡記』宗曉撰『施食通覧』所収（『新纂大日本続藏経第五七
卷一三三頁下段』）
- (18) 『仏祖統記』卷第三七・法運通塞志第一七之四
嘗夢神僧曰六道四生受苦無量、何不作水陸大斎普濟群靈。帝乃披覽藏、
經創製儀文、三年乃成。遂於金山寺修供帝乃披覽藏。（大正新脩大藏
經四九卷三四八頁下段）
- (19) 宗曉述『水陸緣起』宗曉撰『施食通覧』（嘉泰四年）
本朝東川楊鐔祖述、製儀文三卷。行於蜀中、最為近古。（『新纂大日本
続藏経五七卷一四四頁中段』）
なお、水陸会そのものについては下記論文参照。
坂本道生「水陸会成立の経緯と展開について」（『天台学報』五三、二
〇一〇年）
- 羅翠恂「水陸会における千手観音の役割に関する一考察」（『早稲田大
学総合人文科学研究センター研究誌』一、二〇一三年）

(20)『南海寄歸内法伝』卷第一

然聖開立播之服、通被寒郷。斯乃足得養身、亦復何成妨道。梵云立播者、訳為裏腹衣。其所製儀。(大正新脩大藏經五四卷二二四頁中段)

(21) 洞天福地の成立と展開については下記文献参照。

三浦国雄「洞天福地小論」(『東方宗教』六一、一九八三年)のち同氏『中国人のトボス・洞窟・風水・壺中天』(平凡社、一九八八年)所収李育富「道教洞天福地之新探」(『楽山師範学院学报』二〇一〇年第一〇期)〔中国語文献〕
李海林「道教洞天福地形成新考」(『宗教教学研究』二〇一四年第四期)〔中国語文献〕

(22)『水経注』卷三四・江水

自三峡七百里中、两岸連山、略无闕処。重巖疊嶂、隱天蔽日、自非停午夜分、不見曦月。

(23)『大莊嚴論経』卷第二

王説偈已即詣塔所、以此宝珠置塔根上、其明顯照猶如大星。若日出時照王宮殿暉曜相映倍於常明。(大正新脩大藏經卷四卷二二三頁上段)

(24)『大方広仏華嚴経』卷第七

諸龍住処頻伽聲、微密天中龍女聲。(大正新脩大藏經卷九卷四四〇頁下段)

(25)『法華経』方便品第二

若於曠野中積土成仏廟、乃至童子戲聚沙為仏塔如是諸人等皆已成仏道。(大正新脩大藏經九卷八頁下段)

(26)『造塔延命功德経』

有諸相師来共占相謂言、此牧牛児却後七日必當寿尽。是牧牛児又於異時、與諸小児聚沙為戯。中有小児摧沙為堆、言作仏塔高一磔手、或二或三至四磔手。時此小児戲聚沙塔高一磔手、却後更延七年寿命。於聚沙時、有辟支仏持鉢而行、時諸小児以嬉戯心。將沙奉施言我施糗、時辟支仏引鉢受之、以神通力沙變成糗、時諸小児見此因縁。皆悉獲得清淨信心、時辟支仏與諸小児悉授記。作如是言、汝諸童子所造之塔。高一磔手者、於未來世作鉄輪王、王一天下。二磔手者作銅輪王、王二天

下。三磔手者作銀輪王、王三天下。四磔手者作金輪王、王四天下。時諸小児以嬉戯心造如是塔感如是果、何況大王發至誠心。若有善男子善女人、以決定心如法造塔。(大正新脩大藏經一九卷七二六頁中段)

(27)『造塔延命功德経』

仏薄伽梵自利他功德円満、復能満足衆生之願。我今成就第一法身發菩提心、於薄伽梵所有造塔軌儀法則。一一次第如法奉行、第一採集妙華、以陀羅尼加持七遍、散布壇上供養如來。陀羅尼曰(…中略…)第十二次於塔上安傘蓋時、以陀羅尼加持一遍。(…後略…) (大正新脩大藏經一九卷七二六頁中段・七七頁中段)

(28)『造塔延命功德経』

造塔功德其福如是。若塔破壞變作微塵、風吹一塵散落他処。塵所經過山林河海、一切衆生觸斯塵者、永更不受雜類之身、捨身受生常得見仏。(大正新脩大藏經一九卷七二七頁下段)

(29)『雲笈七籤』卷二七・洞天福地部

第六赤城山洞、週回三百里、名曰上清玉平之洞天。在台州唐興県、屬玄洲仙伯治之。

(30)『雲笈七籤』卷二七・洞天福地部

第七峨眉山洞、週回三百里、名曰虚陵洞天。在嘉州峨嵋県、真人唐覽治之。

(31)『雲笈七籤』卷二七・洞天福地部

第八廬山洞、週回一百八十里、名曰洞壘真天。在江州德安縣、真人週正時治之。

(32) 天台山に関する著述は数多いが、智顗を中心とした総合的な論述としては下記を参照。

陳公余著、野本覚成編著、朱学根訳『聖地天台山』(佼成出版社、一九九六年)

(33) 鎌田茂雄『中国仏教の寺と歴史』(大法輪閣、一九八二年)

駱坤琪「峨眉山宗教歴史初探」(『宗教教学研究』一九八四年第一期)〔中国語文献〕
秦孟瀟主編・陳立權監訳・邱茂訳秦孟瀟ほか『中国仏教四大名山図

- 鑑・五台山・峨眉山・普陀山・九華山」(柏書房、一九九一年)など。
- (34)『天台山記』
赤城丹山之洞。上玉清平之天。周迴三百里。洞門在樂安縣界。即十六洞天第六洞也。(大正新脩大藏經五一卷一〇五二頁下段)
なお、『天台山記』については下記文献を参照。
薄井俊二『天台山記の研究』(中国書店、二〇一二年)
- (35)『廬山記』
至尋真沖虛觀、古名詠真洞。道書真誥述三十六洞天、詠真洞天第八七十二福地。廬山為元辰福地。是觀也即詠真洞天。(大正新脩大藏經五一卷一〇三七頁上段)
- (36) 注21参照。
- (37)和泉市教育委員会編『仏並遺跡発掘調査報告書―エッソガソリンスナド建設に伴う発掘調査―』(和泉市教育委員会、一九九三年)
乾哲也「仏並遺跡出土の「仏廟 仏塔」銘特殊須恵器―その性格と年代―」(『大阪府文化財協会研究紀要』二、一九九四年)
- (38)川口武彦「茨城県水戸市山田窯跡群出土の大形瓦製品」(筑波大学先史学・考古学研究)一五、二〇〇四年)
川口武彦「木葉下窯跡出土の陶製相輪」川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会編『菟玖波―川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集―』(川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念事業実行会、二〇〇七年)
- (39)川口武彦「台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の相輪窠描き瓦―画像から読み解く郡衙周辺寺院の造塔過程―」(『茨城県考古学協会誌』一九、二〇〇七年)
- (40)和泉市史編さん委員会編『横山と槇尾山の歴史』和泉市の歴史一(大阪府和泉市、二〇〇五年)七五―七九頁(山下有美氏担当)
- (41)川口武彦「台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の相輪窠描き瓦―図像から読み解く郡衙周辺寺院の造塔過程―」(『茨城県考古学協会誌』一九、二〇〇七年)
- (42)香川・下寺尾遺跡群発掘調査団編『香川・下寺尾遺跡群…北B地区・下寺尾廃寺地区・篠谷地区発掘調査報告書…神奈川県茅ヶ崎市』(香川・下寺尾遺跡群発掘調査団、二〇〇五年)
- (43)富山市教育委員会埋蔵文化財センター編『富山市開ケ丘中遺跡発掘調査報告書』(富山市教育委員会、二〇〇七年)
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター編『富山市開ケ丘中遺跡・開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』(富山市教育委員会、二〇〇三年)
- (44)和歌山県文化財センター編『北山廃寺、北山三嶋遺跡…中山間総合整備事業(北山地区)に伴う発掘調査報告書』(和歌山県文化財センター、二〇一二年)
- (45)木津川市教育委員会編『神雄寺跡(馬場南遺跡)発掘調査報告書』(木津川市教育委員会、二〇一四年)
- (46)大谷女子大学資料館編『札馬…兵庫県加古川市志方町所在…窯跡群発掘調査報告書』(大谷女子大学資料館、一九八三年)
- (47)小松市教育委員会編『戸津』(小松市教育委員会、一九八三年)
小松市教育委員会編『戸津古窯跡群…戸津古窯跡群発掘調査報告書Ⅱ』(小松市教育委員会、一九九二年)
- (48)川口武彦「台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の相輪窠描き瓦―図像から読み解く郡衙周辺寺院の造塔過程―」(前掲注41)
- (49)なお、現存する石製相輪の現状については下記参照。
江浪滋「石製の相輪と鴟尾など(上)(下)」(『史迹と美術』七五―三、四、二〇〇五年)
- (50)行基と道昭の関係については、室町期成立の『行基大菩薩行狀記』に「廿四才にて受戒。受戒後、道昭禪師を師範として元興寺に住し給いて、瑜伽唯識等を修学したまふ」とあり、また『三国仏法伝通縁起』『本朝高僧伝』などの行基が道昭に師事したという記述が根拠とされている。ただし、近年では道昭を行基の教学上の師とする伝承には疑義がもたれており、本論ではとくに両者が師弟関係にあることよりも玄奘、道昭、行基という人的な時系列の関係を重視したい。たとえば両者の関係について、道昭と行基の接触の時期や唯識学の系統から、師弟関係を否定するとともに、それよりは行基が道昭を介して三階宗經典の受

容と教学を重視する見方がある。吉田靖雄『行基と律令国家』（吉川弘文館、一九八七年）、吉田靖雄『法相宗の伝来と道昭・行基の関係』直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』上（塙書房、一九八八年）七〇～八〇頁。吉田靖雄『行基―文殊師利菩薩の反化なり―』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）三三～三六頁。

これに対し、道昭と行基の利他行実践の活動を行い、国家仏教とは異なった行動をとった点から仏教教義を離れた両者の関係を示唆する説もある。

- (51) 速水侑『行基の生涯』『民衆の導者 行基』（吉川弘文館、二〇〇四年）ここでふれる道昭の経歴に関しては下記論考参照。

中村浩『僧道昭に関する諸問題』（『大和文化研究』一四―一八、一九六九年）

佐久間竜『道昭』『日本古代僧伝の研究』（吉川弘文館、一九八三年）

〔初出は一九七二年〕

水野柳太郎『道昭伝考』（『奈良史学』一、一九八三年）

- (52) 井上光貞『南都六宗の成立』『井上光貞著作集』第二卷（岩波書店、一九八六年）〔初出は一九六一年〕

- (53) 藪田嘉一郎『粟原寺塔銘について』（『考古学雑誌』三七―四、一九五一年）

岸哲男『比売朝臣額田』について―粟原寺三重塔状鉢銘の意味（『二松学舎大学論集』昭和五一年度、一九七六年）

- (54) 山田亮賢『華嚴の善知識について』（『印度学仏教学研究』九―二、一九六一年）

- (55) 『史跡土塔・文字瓦聚成』（前掲注3）巻頭カラー図版、七九頁七二図一〇八七

- (56) 『続日本紀』養老元年（七二七）四月壬辰（二三日）

方今、小僧行基并弟子等、零壹街衢、妄説罪福。合構朋党、焚剝指臂、歴門仮説、強乞余物、詐称聖道、妖惑百姓、道俗擾乱。四民棄業、進違釈教、退犯法令。二也。

- (57) 『続日本紀』天平三年（七三〇）八月癸未（七日）

比年、随逐行基法師、優婆塞・優婆夷等、如法修行者、男年六十一已上、女年五十五以上、咸聽入道。

- (58) 『続日本紀』天平一十七年（七四五）正月己卯（二二日）己卯。詔以行基法師為大僧正。

(59) 本論では考古学的考察を基本とし、土塔造営とその前後に限って取り扱ったため、ふれえなかった論考を含め、土塔造営の意義に関する諸説は下記論文で整理されており、あわせて参照されたい。

近藤康司『大野寺土跡・土塔の考古学的検討』『行基と知識集団の考古学』（前掲注1）

（もんた せいいち 歴史文化学科）

二〇二〇年十一月十一日受理

